

令和8年度第2回運営推進会議議事録

日 時： 令和8年7月23日（木） 15:00～16:15

会 場： グループホーム萌 レクリエーション室

出席者：

利用者家族	1名	斐川あんしん支援センター	1名
地域住民の代表	5名	利用者様	2名
欠席	3名	その他（代表・ホーム長・職員）	5名

令和8年度 第2回 運営推進会議の開催

- グループホーム萌の令和8年度第2回運営推進会議を開催。
- 司会は代表の 代表（書記はホーム長）。

運営推進会議の目的

- 目的の要点：
 - 利用者・職員ともに安心して過ごせる施設づくり。
 - 地域の皆さまと共に、初めて取り組んだ行事をご紹介。。
 - 研修で学んだことを皆さまにもお伝えしたい。
- これらを実現するため、10名の推進委員の協力が重要と共有。

今年度の目標：「人が育ち、みんなが誇れる施設へ」

- 利用者が「ここで暮らせてよかった」と感じる安心・安全と楽しさの提供。
- 日常の取り組みや学びを推進会議・地域勉強会で発信。
- ボランティアを深め、地域で認知症を支える輪を拡大。

（夏のサマータイムの導入）

酷暑により、熱中症になる職員もいる中で対策として、入浴時間の30分前倒しや早番職員や中番職員の30分前倒しによる余裕ある業務を7月21日より実践している。

（心肺蘇生）

重度の熱中症による心停止に伴う心肺蘇生の訓練を行った。

（施設活動報告と参加者の振り返り）

パン作り教室の体験が最初に共有された。参加者は、職員からパン捏ねの基礎を丁寧に学び、小麦粉の違いについ

でも詳細な解説を受けた。出来上がりはピザ風のパンで、味への評価は「とても美味しかった」と好意的であった。一方で、参加者自身が工程に没頭するあまり、施設の方々と「一緒にやる」という視点が欠け、玉ねぎ刻みなどの準備作業に従事していた施設側との連携が十分でなかった点を反省している。

続いて、地域とのつながりを重視した活動報告として、「おいでませ喫茶コミセン」への訪問、地域の「いりすの丘」での笹巻き作りなどが紹介された。施設理念として「自分らしさ」を尊重する姿勢が示され、過去の輝き・趣味・得意を現在も活かす取り組みが誇りにつながると整理された。具体例として、夏の洋服の購入支援（選ぶ過程を楽しむ様子が印象的）、蓮の花見、七夕飾りなど季節を感じる行事が挙げられた。新規入所者（認知症を含む）に対しては、得意領域の事前聴取と役割付与により「居場所感」や「することがある」感覚を醸成し、落ち着きの支援を図っている。また、家族面会時には介護記録の閲覧を通じて日頃の様子を共有し、インスタグラム発信が安心につながっているとの家族の感想も記録された。

（施設での取り組みと手作りおやつを提供）

利用者が主体的に関わる活動の重要性が強調され、ジャガイモ収穫（豊作）、オリジナル市場（制作物の販売）、レモンケーキ、梅シロップ（熱中症対策）、芋もち、ぶどう汁、水ようかん（脱水対策）、フルーリー（クッキー＋アイス）などの多彩な取り組みが紹介された。新しいことへの挑戦に利用者が積極的である様子がうかがえる。

会議当日は、手作りおやつとして「芋もち」と「ぶどうジュレ」が提供された。男性職員が中心となり調理を担当。当日の配膳では、呼びかけや配布順の指示が錯綜し、食べ方説明のタイミングが前後するなど、現場連携に軽微な混乱が生じたものの、最終的には各参加者へ行き渡り、落ち着いて試食へ移行した。

（夏季の食中毒予防に関する専門研修）

感染症委員会の職員が、梅雨から夏にかけて細菌性食中毒が増加する背景と、高齢者は胃酸・免疫低下により少量の菌でも重症化しやすいこと、施設では同一食事により集団発生しやすい特性を踏まえ、具体的なリスク管理の必要性を体系的に解説した。対象となる代表的な菌は6種（O157、カンピロバクター、サルモネラ菌、黄色ブドウ球菌、腸炎ピブリオ、ウェルシュ菌）。

（会議の総括と参加者からのフィードバック）

運営側は、利用者の安全・安心・笑顔のために、熱中症対策のサマータイム導入、心肺蘇生（CPR）研修、パン教室の取り組み報告、食中毒予防研修を総括した。指定発言では、心肺蘇生について「平時から研修や実地練習を重ねないと、いざという場面で即時行動に移すのは難しい」との認識が共有され、継続的な参加の必要性が確認された。食中毒予防に関しては「普段は食べることに意識が向きがちだが、家庭でも実践可能な予防策を具体的に学べた」との評価が寄せられた。

閉会にあたり、アンケート協力の依頼とお土産の配布が行われた。

来訪者からは、他施設では行政・施設・家族の3者が簡易説明で終わる事例が多く、今回のようにレジュメやスライドを用いた丁寧で企画性の高い進行は稀であり、取り組みが多く充実しているとの評価が示された。施設の強みとして、利用者一人ひとりのニーズを尊重し、個別性を活かす運営姿勢が本音ベースで高く評価されている。散会時には、参加者間で心肺蘇生の負荷感（胸骨圧迫の回数・継続負担）や、面会による安定感の向上など、現場実感を伴う雑談が交わされ、熱中症への注意喚起とともに会が締めくくられた。

アンケートより (N=9)

1. 介護全体の内容はわかりやすかったですか？

とてもそう思う 9名

2. 萌の取り組みは理解できましたか？

とてもそう思う 9名

3. 職員の説明や雰囲気から「安心・信頼できる施設」だと感じましたか？

とてもそう思う 9名

4. 今後も地域の一員として、この施設に関わりたいと思いましたか？

とてもそう思う 9名

5. 地域に開かれた施設としての姿勢に共感できましたか？

とてもそう思う 8名